

＜日本レジャー・レクリエーション学会第 39 回学会大会 シンポジウム報告
於：江戸川大学＞

総括セッション記録：ひとがリピーターを育み、リピーターがひとを育てる
－ 着地型観光に学ぶ地域の誇り －

パネリスト

庄司邦昭¹ 後藤新弥² 樋口正一郎³
恵小百合⁴ 小高静子⁵ 井崎義治⁶

コーディネーター

梅谷秀治⁷

The interaction between repeatvisitors and community residents
－ Making the community pride through the destination oriented tourism －

Kuniaki Shoji¹, Shinya Goto², Shoichiro Higuchi³,
Sayuri Megumi⁴, Shizuko Kodaka⁵ and Yoshiharu Izaki⁶
Hideharu Umetani¹

梅谷：よろしくお願ひします。平成元年から流山に住んでいます。また、5年前までは電通に勤めておりました。今では「ファシリテーション・コーディネーター」と名乗っております。勤めていた頃は、東京ディズニーランド（TDL）やハウステンボスのオープン3年前からオープンまでそれぞれ関わっておりました。昨日、地域研究で水元公園に行きましたが、TDLだと29年前、ハウス

テンボスだと20年前、膨大な土地があったのを思い出しました。20年流山に住んでいながら、あのような素晴らしい場所が近くにあるとは全く知りませんでした。運河の資産をもっと地域の交流に活かさなくてはいけないな、と思いました。外の仕事ばかりでなく地元の役に立ちたいと思い、4年前から流山市のコミュニティ審議会委員、また自治会会長、市民参加条例の準備委員をやら

1 東京海洋大学
Tokyo University of Marine Science and Technology

2 江戸川大学
Edogawa University

3 美術家・都市景観研究家
Artist, Researcher on Urban Landscape

4 江戸川大学・江戸川大学総合福祉専門学校
Edogawa University

5 流山ガーデニングクラブ「花恋人-かれんと-」会長
Nagareyama Gardening Club "Karento"

6 流山市長
Mayor of Nagareyama City

7 行政コミュニケーションアドバイザー
Communication Advisor of Administration

せていただいておりますが、レジャー産業に関わったこれまでの経験も踏まえて、本日コーディネーターを仰せつかったと思っております。

さて、今回の学会の総合テーマは「生態系資源と文化的資源をつなぐライフデザイン－架け橋としてのレジャー・レクリエーション－」で、これまでセッションA・Bを通じていろいろな資源があることを見て参りました。この総括セッションのテーマは「ひとがリピーターを育み、リピーターがひとを育てる－着地型観光に学ぶ地域の誇り－」となっております。総合テーマで言うところの資源をつないでいく上では「ひと」が大事ではないかと思えます。したがって、その点から議論をしていきたいと思えます。

始めるに当たって、セッションA・Bは連続して参りましたので、まずこの場に初めてご登壇いただいた小高静子さん（流山ガーデニングクラブ「花恋人－かれんと－」会長）から、自己紹介を含めて、いま何をやられているのか、という話を伺いたいと思えます。

小高：小高と申します。私たちは日夜野良仕事に明け暮れておりますが、毎年5月の連休にはオープンガーデンをしております。よろしくお願いたします。

梅谷：続いて、お忙しい中、この総括セッションからご参加いただいている井崎市長お願いたします。

井崎：流山市長の井崎です。4年前、流山市は全国で初めてマーケティング課をつくり、その後さまざまな活動を展開して参りました。本日のテーマにある自然資源や文化資源を有機的に結びつけながら、誰に何をアピールするのかを考えながら、流山のブランド力の向上を目指して活動しております。

梅谷：それではテーマに入っていきたいと思えます。まず、いま後ろに出ている映像は「花恋人（かれんと）」の事業ですが、小高さん、説明していただけますか？

小高：これらは会員の庭ですが、季節の良いときのお花の写真です（図1）。それから、グリーンフェスティバルのときのお手伝いの様子、市民まつりで苗を販売しながら市民の皆さんと交流している様子、それからオープンガーデンのときの写



図1 花恋人会員の庭



図2 オープンガーデンの様子

真になります（図2）。このときは雨でしたが、多いところでは1日200人ほど、会期3日の間に600人もお見えになり、そのおもてなしで忙しくしておりました。

梅谷：オープンガーデンはのべ7000人近い方がいらっしゃったと聞いておりますが、非常に活発だと思いますが、写真の説明とは別にもう少しオープンガーデンの話をしていただけますか？

小高：私たちは、自分たちの庭をきれいにして皆様に見ていただきたい、というほんの少しの欲求を持ち、それをいろいろな機会にいろいろな方に広めていただいて、次から次へと来てくださるとありがたいな、と思ってやっております。会員はだいたい70名ぐらいおまして、その中の35軒がオープンガーデンをしております。毎年5月の連休あとに、「どなたでも、いつでも、連絡無しで構わないので来てください」という庭の一般公開をしております。その日は朝から晩まで庭を開いてお待ちしている訳です。すると、皆さんとても気楽に、お友達と誘い合わせてグループでお見えになります。だいたい流山の方が50%くらい、あとは近隣の野田市や柏市、松戸市の方、たまに東京都や茨城県、埼玉県からもお見えになります。

梅谷：オープンガーデンというのは、庭をつくる

人と訪れる人が絡みながら大きくなっていくと思うのですが、市の方ではどのように関わっていらっしゃるのでしょうか？

井崎：市では6年前からガーデニングコンテストをやっています。その最初の表彰式の時に、ガーデニングクラブをつくっていただけないか、というお願いをしました。また、オープンガーデンもやっていただきたい、というお願いもしました。それをしっかり受けとめて発展させていただきました。今やガーデニングクラブがオープンガーデンブックまでつくられ、2,000部印刷され、紀伊国屋書店でも売れ、「黄色い表紙」の本を持って街を歩く方を多く見かけるようになりました。

梅谷：ありがとうございます。まさにオープンガーデン事業はこの統括セッションのテーマのような形で動いていると思いますが、ここで言う「ひと」と「リピーター」について、もう一度考えてみる必要があると思います。

ご存知の通り、TDLの場合98.5%がリピーターなのですが、これは「満足したのでまた来たい」ということでリピーターになっている訳です。そういう思いにさせているのは、営業やパレードもありますが、究極はキャスト（従業員）が大きな要因となっています。というのも、パリや香港のディズニーランドと比較してみるとわかるのですが、TDLのように従業員が満足度をつくれていません。ひとくちに従業員と言っても直接的に関わっている人だけではなく、さまざまな人が存在しています。資源を発掘する人、呼びかける人、説明する人、それ以外にも、地元の人達がどのようにおもてなしをするか、ふれあいをつくるかで変わってくる訳です。ですから、「ひと」について見つめ直してみると、いろいろな新しい可能性が見えてくると思います。

私はディズニーの話をさせていただきましたが、「ひと」について皆さんのご意見をお聞きしたいと思います。後藤先生いかがでしょうか？

後藤：株式のしくみを教える日経ストックリーグに学生を参加させていますが、企業を研究していくと、どれだけ人にやさしいか、ということがポイントになってくることがわかります。そういう意味で、TDLは高齢者の来場を想定していますし、子どもやお母さんを迎えに来るお父さんの車

について、駐車料金を無料にするなど、配慮が行き届いているように思います。ひとは一人ではなくて、必ず家族や友人などが周りにいます。ある人がいい気持ちになれば必ず友達に声をかけてくれてリピートしてくれる、という発想が重要なのではないのでしょうか。単なる数としてではなく、一人の人が持っている背景を重視することが大事だと思っています。

梅谷：ありがとうございます。同じ「ひと」というテーマで恵先生お願いします。

恵：ディズニーランドに行ったときのことを思い出してみましたが、多様な楽しみ方があり、また季節や時間帯によって新しい魅力が発見できます。つまり喜ばせ方（すぐりどころ）を知っていて、「喜ばされたい」人の期待値とうまく合うのではないのでしょうか。そういう人達にとっては満足度が高いだろうし、逆に自分をそういう姿勢に持っていく人も出てきていると思います。

梅谷：ありがとうございます。ここでディズニーから離れて、レジャー、レクリエーション、観光という視点から考えてみると、観光とは、自然や歴史、景観、食、体験といったいろいろな縁が積み重なってできているものだと思います。このうちリピートにつながる最も大きな縁は「ひと」に関わる縁だと思います。ちょっとした気遣いの積み重ねが観光でのリピーターを生むと思うのです。セッションBでは海外の景観という面からお話をいただきましたが、樋口先生、「ひと」の縁という点ではいかがでしょうか？

樋口：最後の映像で出したキャボット・サーカス（Cabot Circus）は、真ん中にレンガ造り風の中世のシエナの棟のようなものが建っており、3つの街区が集まってきて、一種のステージ状になっています。ガラスの屋根が波打つ形でパフォーマンスをしているようにつくられており、そこへ行くと、なんとなく主役になったような気分になってしまいます。ショッピングセンターでありながら劇場のようなつくりになっている訳です。商業施設というと高級品を中心にしたイメージがありますが、今や人に焦点を当てた事例が出てきています。

梅谷：ありがとうございます。庄司先生、同じテーマでいかがでしょうか？

庄司：セッション A でもお話をさせていただいたように、自然の川があるだけでは魅力に乏しいと思います。自然の川に船のような人工的な動くものがある、はじめてひとつの風景として成り立っているのではないかと思います。人がいてそこに集まることで汚い部分が見直されたりするので、とりあえず人が集まったりボートを漕いだりできることが人との関わりという点で重要だと思います。

梅谷：ありがとうございます。先程、主役になるというお話がありましたが、やはり人は誰でも認められたい、役割を持ちたい、あるいは経験したい、といったいろいろなニーズを持っています。ですから、こういうレジャー・レクリエーションといった活動をするときに、その場で役割をどのようにつくっていくか、を考えることで新たな可能性が出てくるのではないのでしょうか。人の中には、資産を守る人、それを活性化する人、つくる人、運営する人、それと同時に参加する人、そこに住む人、とさまざまな人が関わってくると思います。

今回のテーマは「ひと」とともに、地域とレジャー・レクリエーションのあり方も問われていると思います。そこで、ここからは地域に焦点を当てて議論を進めていきたいと思っています。

実は、去年の第 38 回学会大会の「地域興しとレクリエーション・スポーツ」という基調講演の中で、次のような提案がなされています。すなわち、「今日の多様な価値観と多彩かつそれぞれが個性的な住民の行動様式が展開される」中で、「新たなアソシエーション論とコミュニティ形成論が必要であろう」というのです。千葉県で初めて住民基本条例をつくり、住民参加のもとで、新しい施策を展開しようとしている流山市は、地域の取り組みについてどのような考え方をしているのか、市長に話を伺ってみたいのですが。

井崎：流山市はこれまで「へそのない町」と言われてきました。つまり、人々が集まる場所やイベントが無いために、「人・金・情報」のほとんどが市外に流れていました。そこで今は、流山おたかの森駅を中心に市民と連携してイベントをやったりして、交流人口を増やすためのしくみをつくらうとしています。マーケティング課をつくっ

たときに、流山を劇場としてとらえて交流人口を増やすこと、それから市民に演出やプレーヤーとして参画していただくことを大事に考えていました。

それから、流山市に新しく移って来られた理由を聞くと、そのほとんど 9 割が緑を挙げていらっしゃいます。基本的に住宅都市ですから、売り込んでいくものは緑と自然、それに良質な住環境ということになります。そこで、セッション B で恵良さんもおっしゃっていましたが、緑の大きな拠点を活かすと同時に、失われていく緑を取り戻すために、「グリーンチェーン戦略」というものを推進しています。これは「ヒートアイランドを抑制するためにみんなで緑をつなげていこう」というものです（図 3）。

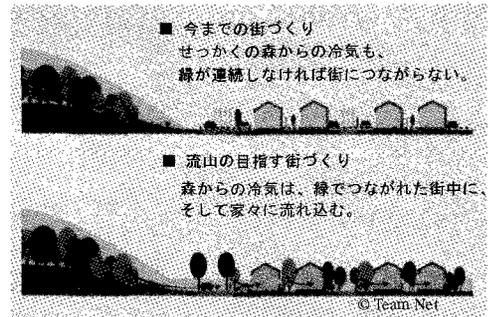


図 3 グリーンチェーン戦略理念図

具体的には、認定制度を設けておまして、敷地内に一定以上の緑を植えていただきますと、市内の 5 金融機関から住宅に特別融資が低金利で受けられます。この 3 年半で 2000 戸以上にこの認定を取得していただきました。そして 5 年もたつと緑陰に包まれた住宅街が形成されていくことになります（図 4）。



図 4 グリーンチェーン認定マーク

これらが先程のガーデニングクラブの活動等と結びついていくと、ひとつの資源になっていくと思います。それから、今回の学会大会の総合テーマから見れば、利根運河も注目できます。自然を活かしながら文化的要素を加えていくという点で、今までは割烹料理屋さんがありましたが、これに加えてフランス料理店やギャラリーもできまして、いろいろな展示やコンサートが開かれるようになりました。また江戸川河川事務所には利根運河交流館が設けられました。市民の力でこうしたことが形になり、秋葉原から35分で来られるところに、これだけの自然と文化を楽しめる空間として整備されると資源になります。たとえば、現在の隣の「流山セントラルパーク駅」最寄りの生涯学習センターでは、市民ボランティア270人によって展覧会が開かれております。行政がルールを敷くのではなく、市民の総意でルールを敷いていただいて、そこで何か問題があれば市が応援するという形を取っております。

梅谷：ありがとうございます。いま市長から流山周辺の動きについて説明がありましたが、小高さん、「常日頃こんなことがあります」といった事例を紹介していただけますでしょうか？

小高：話が戻るかもしれませんが、ガーデニングクラブのオープンガーデンに見える方のリピート率なのですが、初めてお見えになる方が60%、2回目・3回目という方が35%になります。ですから、1回見えた方は、もう1回お友達と一緒に来たいと思われているようです。

私たちはなるべくもう1回来て欲しいし、来られるような庭づくりをしたいと毎年考えております。先程のディズニーランドの例ではありませんが、主役は自分でステージが庭、来てくださる方がゲストで、どれだけ面白い芝居をするか、きれいな庭を見せるか、ということを毎日考え、1年間ずっと庭仕事をしている訳です。ですから、来られた方には丁寧に花や木の説明ができますし、だからこそ、1回来られた方はまた来たくなるのだと思っております。

梅谷：ありがとうございます。かなり高いリピート率だと思います。それにはキャスト、迎える人達が重要な役割を果たしているのだと思います。

それでは、地域のことに深く関わられて居られ

ます恵先生に、何か事例紹介をしていただきたいと思います。

恵：流山はすごいところで、歴史的なところもそうなのですが、新しいものが入ってくるときに、たとえば常磐自動車道が通るときでも、それを通すけれどもそのことによってコミュニティが分断されないように、新たに蓋掛けをして半地下化したところから公園機能が生まれるように、何かプラスアルファが生まれる知恵を皆で出すのです。長い時間かかってつくばエクスプレスが通るようになったときも、先程、恵良さんがおっしゃっていましたが、都市公園法の中で「森のままでいい」都市林として、当時の建設省に働き掛けて新たなジャンルを作って「おたかの森」を残すことを実現してしまいました。そういうことによって、既存のことに囚われないセンスが磨かれているのではないかと思います。何か提案されたときに、ただ反対するのではなくて、自己責任として、必ず具体的な提案を出してくる人が多いと思います。

もうひとつ、ガーデニングクラブの皆さんも、定年退職とともにライフスタイルの変化の中で、駐車スペースがいらなくなると、そこをガーデンに切り替えたり、自動車を手放して自転車になさったり、いわば「乗りかえ型」で、ライフステージごとの生き方が見事です。つくばエクスプレス沿線の新住民の方々も、こういう先輩方のいるところに入ってくるので、そことつながってプライドの持てるレベルのところから学んでいけるし、その満足感を価値観として持つことができると思います。キャストをしよう、とか思われている訳ではないでしょうけれども、セルフディレクションのうまくできている人達が住んでいることがこの土地の価値であると思うし、うらやましく思います。

梅谷：ありがとうございます。井崎市長にも心強い意見が聞けたのではないのでしょうか。私もひとつご紹介させていただきますが、実は流山1丁目から8丁目にかけて、ここは元々流山の核になるところなのですが、そこに今年の春から「菜の花協議会」というものが誕生したのです。最初は単に地域交流センターというところが持っているEポートに乗っていただく体験をしていただいたの

ですが、そうしましたら、その体験から「川が汚い。土手が汚れている。それでは自分たちで掃除をしよう」ということになった訳です。この地域は江戸川べりで菜の花の素晴らしいところなのですが、1ヶ月足らずのうちに300人が集まって掃除をやり、5月に続いてこの11月にもやりました。それだけではなくて、一茶双樹記念館や近藤勇陣屋跡といった施設もあるところなのですが、そういったものをつないで流れをつくっていかうとしています。さらに付近にある流山駅・流山電鉄の活性化のために導線づくりをやっていかう、自分たちのできる事は自分たちでやっていかうという動きが出てきています。そして、やがてかういったものを小学校区で取り組んでいかうという動きが始まっています。

恵先生もお話されたように、流山は、レジャー・レクリエーションの今後の可能性においても、住民がいろいろな力を持っていると思います。

では、これまで「ひと」ということでお聞きしてきましたが、ここからは「地域とレジャー・レクリエーション」に関する取り組みについて、お話をいただけますでしょうか。樋口先生、いかがでしょうか。

樋口：こちらの方は運河ぐらいしか存じ上げないのですが、これはまさに国際レベルで言ってA級の魅力があると思います。どんな人でもその素晴らしさに驚くと思います。ですから、これを放置するというのは残念です。相当昔から足を運んでいるのですが、あれ以上変化をしないので、価値が理解されていないのではないかと、思って見てきました。もうひとつ、ついでにお話させていただきますと、私がセッションBでお話させていただいたのは、「人間の創造性の偉大さ」を感じられないところはだいたいダメなのです。どんな場合でも、「人間は偉大なのだ」ということを皆享受したいと思っているのです。それによって自分も元気が出る、というものが無いといけません。それには利根運河は最高のもので、日本でも有数の建造物・土木だと思えます。

梅谷：ありがとうございます。同じく「地域とレジャー・レクリエーション」について、スポーツの話をからめてけっこうですから、後藤先生、

よろしくお願ひいたします。

後藤：先般、北海道の山で大量に遭難されました。大変不幸な例だと思えますが、その近くの阿寒湖の話を見せていただきたいと思えます。

阿寒湖は実は外周を1周できないのですね。私有地ということもあるのですが、北半分がヒグマの生息地で非常に危険でして、林道はあるのですが1周できないのです。日本でも非常に希有な例なのですが、地元では何とか1周できるようにできないか、と努力して居られるようです。私としては「むしろ半周しかできないという剥き出しの自然の部分をアピールされたらどうか」と申し上げたのですが、そのとき同席されたアイヌの方は、「そうなんだ。『人が自然を守る、環境を守る、保護する』というのは大変おこがましい話で、『自然が人を守ってくれている。われわれ人間は自然に守られている存在なんだ』という点から活動を変えたらどうか」とおっしゃっていました。最近はどこも観光地でもそうですが、夕方来て1泊して早朝には出発してしまうような、ツアーセットのお客さんが多くて、どうしても連泊してくれない・長期滞在してくれないという悩みがあるようです。それはひとつには、そこに自然があるので来る人からお金を取るという姿勢だけではだめなのではないか、ということです。やはり先程も話が出たように、リピートをしてもらうには、ソフトの面で、自然をこのように楽しんでください、という受け入れ態勢が無いといけません。阿寒では、町の観光協会が自費でレンジャーを5名養成して、そのレンジャーがお客様をもてなす訳です。もちろん山岳指導員としての機能も持っているのですが、それだけではなく、ごく普通の方のお手伝いもし、安全を守るということ今年から始めております。この辺は、ただ単に来てくださいというものとは違う事例、たとえば、流山のガーデニングクラブの活動と重なってきます。あるいはスポーツの方で言えば、先日、流山ロードレースというものが開かれたのですが、2000人が参加されて、聞くとところによればボランティアの方が600人もいらっしゃるということです。つまり、地域と密接なつながりを持った方が多いということです。運河やガーデニングの話も、そういうところでなければできない

ものだったのだと感じました。

梅谷：ありがとうございます。同じく「地域とレジャー・レクリエーション」視点から、庄司先生、お願いいたします。

庄司：レジャーという話ではないのかもしれませんが、先程スライドでお話しさせていただきましたように、私が1年間滞在していた内陸のベルリンにも港があります。たとえば流山にも港ができて、そういうところに船が寄るということができたらいなと思います。野田とか流山とか松戸・市川といったところがつながっていくといいと思います。観光船という隅田川の屋形船や水上バスといったものを連想しますが、カリブ海にいるような大きなものではなくて、外国のクルーズ船があちこち出入りして町を見ることができたらおもしろいなと思います。

梅谷：ありがとうございます。

先日Eポートというもので、江戸川を10 km 近く漕いでいきました。ところが、つくばエクスプレスの鉄橋の先まで行きますと、水深が10 cm くらいと非常に浅いところがありました。こういったことも、実際に行ってみないとわかりません。国交省も計画的に河床を浚渫（しゅんせつ）することを考えているようですが、何事も体験してみる事が大事だなと思いました。

庄司：あの、最近のことなのですが、栃木県小山市からこんな話がありました。昔は江東区から材木を運んで、小山市の乙女河岸というところに降ろして、そこから日光の建物を造営したのですが、今年は小山市の市政55周年ということで、船を使って行けるところまで行ってみようということをやりました。しかしやはり何ヶ所か問題点があって、小さい船ではありましたが長靴を履いて船を押ししました。そういうことでも、やってみると面白いかな、と思います。

梅谷：ありがとうございます。「人と地域とレジャー・レクリエーション」ということで、他に何か付け加えたいということがあれば、ご発言よろしくお願いします。

恵：いろいろな人が必ず一定のマインドではなくて、時に応じていろいろなことを思ったり、体調も変わったりしています。川もそうで、いわゆる堆砂（たいしゃ：川の底に砂や土が溜まってしま

うこと）も、やはり川の形が変わっていく中で起こります。実は三番瀬といった下流の方でも砂が足りなくて瀬が痩せたり、いろいろなことが本当にダイナミックに観察できます。これはカナディアンカヌーをしたときの体験ですが、船が底を擦ったときも、たとえば荒川では熊谷の方だと瀬切れしますから、上がるためにはみんなでカヌーを頭の上に担いで山を越える訳です。インディアンウォークというのですが、痛くならないようにカヌーを頭に載せて運ぶためには、バランスを取って一直線に歩いていくと長い距離でも疲れません。そのときに、障害を持った人がいても、いろいろな場面や状況にアクティブに対応できる人材が育っていれば、自分の資源をうまく活かしていると思います。

ひとつだけ市長に苦言を呈するとすれば、行政は法律や税金が決まっていなくて動けないので、こちらが思いつきでいろいろ言っても動きづらいと思います。そこでのマーケティングというのは、糊の機能というか、いろいろなことをつなげ合わせていくことだと思うので、市役所の人達も一緒に遊べる自分時間づかいの上手なプログラムを、市役所の中につくっていただくと凄いな、と思います。市が悪いと言っている訳ではなくて、市民が進んでいますので、「さらに」という意味です。

梅谷：ありがとうございます。それでは、セッションAやBの質疑応答を繰り延べた分も含めて、また「人と地域とレジャー・レクリエーション」という点からさらにご意見があれば、挙手を願います。

古城：江戸川大学の古城と申します。ボート部の監督をしております。実は利根運河なのですが、明治・大正・昭和とかけて100年の間に300回ぐらい、墨田川の下流、向島からいろいろな大学のボート部の選手が利根運河を通して銚子まで行った、という歴史がございます。私自身も昭和52年に流山まで漕いで来たことがあるのですが、もし通水することが難しいとしても、利根運河にあと2 m くらい水を溜めることができれば、文字通り「水の駅」として、ヨーロッパやイギリスにある「ナローボート」(narrow boat)、方向を変えずにすむ縦に細長い船で、運河周辺の七福神巡

りのようなツアーができます。そうすれば、潮来とか小見川にある30分ぐらいの観光船のような形で、新しい起爆剤になると思います。そのことだけ提案させてください。

梅谷：ありがとうございます。そういうご提案があったということで、今後はおそらく中心になって活動していただけるかと思えますし、それに参加されるといいと思います。他にございますか？

恵良：セッションBでお話させていただいた恵良です。流山市は健康宣言都市になっている訳ですが、これとレジャー・レクリエーションがうまくドッキングすると、こんなことが考えられます。たとえば、おたかの森周辺の新市街地に「リングロード」という周回道路をつくるのが構想に入っていますが、それを「健康の道」として位置づけ、東京から来た人にショッピングセンターにあるようなウェルネスの機械を通すことによって、「今日は1000Kcal消費した」とか、目に見える形でリピーターを増やすプランはどうか、と考えました。

梅谷：今のはご提案ということでいいですね。ありがとうございます。他にございませんか？

粟田：流通経済大の粟田と申します。たまたま今日来る途中に本を読んでいたら、J・オースチンの話なのですが、カントリーハウス観光について書かれていました。イギリスには自分の屋敷だったり庭を他人に見せる習慣がある。それは基本的には無料なんですけれども、税金対策という側面がある。これは19世紀、貴族の時代から始まっているのですが、今も続いています。非常に面白いのは、こういう習慣があるからカントリーハウス一般公開というビジネスが定着している、と書いてありました。そういうお家に対しては税金を安くするといったインセンティブを与えていく、という形でやっていくと面白いんじゃないかな、と思いました。イギリスでは伝統的な貴族が、風習として、独占的ではなくて利他的にそういうことをやっている訳ですから、これが提案になればと思いました。

小高：イギリスだとたぶん大邸宅だとか大きなお庭ということで、少々入場料が取れると思いますけれども、日本の場合には、宅地の中で少しでも

いいからきれいにしたい、という程度のお庭が多いと思いますから、あるお家は入場料を取れるかもしれませんが、大方の家は入場料を取れないような規模でございます。その他に、イギリスなんかの場合には、自分の家で育てた苗を売ったりできる訳ですが、日本の場合には庭をつくるのがせいぜいで、そのほかにお店をつくるような敷地がありません。それでも、せいぜい皆様に喜んでいただけたらと思います。

樋口：バブル時代の話なんですけれども、ある製紙会社の社長が何億円もするピカソの絵をロサンゼルス美術館に寄贈したんです。なぜ寄贈したのか、というと、日本では寄贈しても税金が取られてしまう。ところがアメリカのケースでは税金を取りません。そして、寄贈した人の名前のついた部屋をつくる訳です。海外の美術館に行って、人の名前がついていたら、それはその人が寄贈したものだと考えていいと思います。日本は寄贈も売買と見なされてしまい、税金をかける訳です。ですから、日本で寄贈すると、無料で挙げてなおかつ税金が取られてしまい二重に損することになります。それに引き換え、アメリカだとヒーロー扱いです。海外では文化財に対してはそういう扱いになっており、日本だけが遅れています。

恵：いま流山市でガーデニングをやっている方は、本当にご自分で好きなことをやって、それを皆が喜んでくれるという関係になっています。市では木を切ってしまったところからもう一度緑を復活させようとして、熱環境調査というものをやっています。江戸川大学も参加させていただいて、10分おきにいろいろなポイントで気温のデータを取っています。それでいくと、ガーデニングのやり方によって、まわりの気温を下げる効果があって、自分たちも家の中でエアコンをつける時間が短くなる、という事例がデータとして集まっています。市長さんには、いずれ、そのデータを見て低炭素社会の実現に貢献していたら税金を安くする、といったインセンティブとして結びつけていただくと、みなさんの動機にもなり、公益性も高く、市役所としても観光を他の換算値と同じように挙げられるようになると思います。イギリスでナショナル・トラスト運動などしている人たちも、ご自分の家を寄贈して、そこに住み続けな

がらその一部を公開しています。それもひとつの参考になるのかな、と思います。

それから先程、市長さんに市の職員の方の話をしましたが、市の職員の方にもすごく頑張っている方がいるので、ガーデニングコンテストで市民を表彰するのと同じように、市役所の中で何かいいことをつなげてくれた人は表彰するとか、内部のみんなで作る気を出すモードのインセティブと両方セットになると、ますますパワフルになると思います。グリーンチェーン戦略の指標については、企業や銀行の人達と研究会をやってつくった訳ですから、それを今度は市民みんなで作ったらいかがでしょうか。

井崎：市の職員の表彰制度としては、3ヶ月に1回、MVP賞というのがあります。ただそこに推薦を上げるときの発想がおそらくまだ固いかな、と思います。市民とコラボしてこんなことをやった、というのが上がってきているかどうか、検証の余地があるかと思いますが、またいろいろご提案いただければ、実践していきたいと思います。

梅谷：ありがとうございます。NPO活動を含めて、レジャー・レクリエーションに関わる活動というのは継続することが一番大事だと思いますが、その場合には、参考事例があるように、いかにビジネス化するか、すなわちコミュニティ・ビジネスをその中に取り込んでいくか、ということが重要な課題だと思います。それについて担当の方から紹介がありました。また恵先生からありましたように、「ほめる」ということも勇気をつけていく上で素晴らしいことだと思います。

他にございますか？

会場：流山市民でございます。みなさまの話からするとレベルが低い話になるかもしれませんが、流山の中で、利根運河とか特定のところはものすごく広域で有名になっているのですが、それ以外のところで、観光というよりも、市民を中心に楽しむ場所は少しずつ良くなってきています。ところが、そうしてできてきているものについて、意外と市民の皆さんにうまく伝わっていません。結果的には利用されていません。そして利用されていないために、流山にはレジャー・レクリエーションで楽しいところがないという印象になり、最初に市長が言われたように、残念ながら、市民で

ありながら市外に遊びに行ってしまうという傾向があります。これからそれをどうやって解決していくか、というのが課題だと思います。それで、少しレベルが低い話になるかもしれませんが、私なんかも定年退職して10年になります。年も取ってきて、まわりにもそういう人達が多くて、自治会の組織で「みんなで元気を出そう」ということになり、みんなで集まって外に歩きに行く「ぶらり散歩」というクラブを作りました。ただ散歩だけですとつまらないので、素人集団ですがみんなで写真を取って楽しもう、ということになりました。ゆくゆくは写真のレベルを上げるために、パソコンを使って勉強しようとか、体力の健康と同時に脳トレも兼ねて、実際に月に1回くらい出かけてみようということで考えてみますと、意外と流山の中に行きたいところが見つからないのです。それはひとつには、ポイントとしてはあるのですが、ひとつだけですと、まだまだ規模が小さいのでそこだけではつまらない、ということになるんです。それがある程度連続して何ヶ所か、2～3ヶ所まわられるという形のレクリエーションの場をうまくつくれば、市民がどんどん利用するようになり、利用すれば拡がって行くと思います。したがって、どうやって連続ポイントにするか、ということと、せっかくなところを市民にどうやってうまく伝えるか、ということ、われわれもひっくるめてみんなで考えていかなければいけないと思います。

今日のシンポジウムも流山市民の参加が意外と少ないと思います。これは事前のPRがうまく伝わってないのではないのでしょうか。「広報ながれやま」だけでなく、自治会のような組織を通して、どんどん事前にPRしていけば、うまく伝わるのではないのでしょうか。

花恋人(かれんと)の案内図もよくできていて、2～3度見させていただいております。また別に「流山まちなみ会」というものがありまして、散策をする会なのですが、これにも参加させていただいております。そういった場に入ると行くのですが、そういういいものがあるということを市民全体にどうやって伝えるか、ということについて、お知恵を貸していただければと思います。

梅谷：ありがとうございます。他にいらっしゃ

れば、これで最後にさせていただきたいと思いません。

会場：まちネット流山の事務局長としてお伝えします。実は明日、「流山のいいところ教えます」というのを12時45分から、「まちなみ会」と一緒にやります。その中で、どこをどういうふう歩いていけば流山のスポットを歩けるか、ということ、私の方で10ヶ所、写真を入れてご紹介いたします。短い時間ですから十分にお伝えできないと思いますが、そこで逆に来た方から、ここもあればあそこもあるよ、とっていただいて、みんなの認識を変えていきたいと思えます。12時45分から生涯学習センターの会議室なので、よろしく願いいたします。PRでごめんなさい。
梅谷：ありがとうございます。それでは残る時間を使って、今いくつか出た課題に対する答えを探してみたいと思えます。

いま現場でこういう活動をするときに、行政かNPOか、両極端かあるいはその両方かしかいない状況だと思います。市長と事前に相談している訳ではありませんが、PRとか情報共有を含めて、流山市が取り組みを始めているのは、コミュニティ審議会が答申したのですが、小学校区を単位としたまちづくり協議会というものを進めさせていただいております。このまちづくり協議会の場というのは、小学区で防犯とか防災、福祉といった様々な地域の問題を考える場であると同時に、その協議会の中で、それぞれの自治会や社協、いろいろな団体を含めて、「他ではこんなことをやっている。われわれもこんな取り組みをやってみようじゃないか」と話し合う場です。これは行政やNPO、一個人ではない新たな場ができるということなんです。ここでそういう取り組みをすることが、「ひと」と「ひと」のつながりをつくっていきますし、そのつながりができていくということは、実は「レジャー・レクリエーション」の輪が広がっていくだけではなくて、地域のコミュニティが非常に濃密なものになっていくことを意味します。2、3日前に、大学生の就職に関する報道がありましたけれども、就職用の問いに対してはきちんと答えられていた学生が、「あなたの故郷のことを話してください」という問いに絶句して答えられなかったのです。これが今の若い人

たちの現実だと思うのですが、コミュニティの活動や地域におけるレジャー・レクリエーション活動が活性化すると、本当に地域に誇りを持つことができるし、先程のような問いにも「実は私の地域は・・・」と答えられるようになっていくのではないかと思います。そういう新しい場が、いま流山で生まれようとしています。そしてそれを吸い上げて、次の活動にいかにか活用するか、という取り組みをしていければいいなと思っております。市長、何か補足があればお願いします。

井崎：今の地域コミュニティについては、小学校区単位で住民のネットワーク化をはじめとして、さまざまな取り組みができる可能性があると思えますが、やはり問題は、行政の方の担当がどうしても縦割りになっていて、自分がやらなくてもつなぐだけでもいいのですが、つなぐのを忘れてしまうとか、中には「それは自分の仕事ではない」と思っている人がまだ一部いるかもしれません。その辺を早く乗り越えて、自分の担当の仕事でなくてもつないでいくことができるだけでも、ずいぶん市民の方々の力が発揮されて面白いことがたくさんできると思っています。
梅谷：先程、森川先生の昨年の基調講演の「新たなアソシエーション論とコミュニティ形成論」という話をしましたけれども、こういう公共の場もそのひとつではないかと思います。この件について、何かご意見お願いします。

恵：会場に大内先生というご専門の方がいらっしゃいますが、アメリカのNeighborhood組織やコミュニティを見ても一律に同じではなくて、いろいろと地域に応じた個性があるので、その個性に応じていろいろな活動があると思えます。それともうひとつ、コミュニティに入りきれなくて引きこもってしまったり、ちょっと嫌なことを言われたのでご近所づきあいを止めてしまったりとかいう事例を、シングルマザーに関する番組で紹介していましたが、ある意味で「コミュニティ力」でも言うべき洞察力を磨けるような、自分の地域の仲間が何をきっかけにどんなパワーを共有できるのか、元気が出るのか、ということを見出すチャンスが持てるようなプログラムができるとすごいなと思えます。現実にははるく多様な状況があるので、これも合わせ持って、そこからレジャ

ー・レクリエーションにつながるような時間の使い方とか、自分の資質の共有に使えるといいなと思います。

梅谷：ありがとうございました。残る時間は5分少々ですが、全体を通じて何か付け加えることはございませんか？

樋口：地方都市の問題は、「ないないづくし」ということが言えると思います。たとえば東京とパリ、ニューヨーク、ロンドンと比べてみましても、やはり世界の大都市と比べると、東京でさえも人々の欲望に応える・願望をかなえてくれる選択肢は少ないです。そういう意味では、ロンドンの魅力は非常に多岐にわたっている訳です。そういう都市から比べると、地方都市はまさに「ないないづくし」ということになりますので、これをどんな形で払拭していくのか、というのが、いま突きつけられている問題だと思います。ですから、基本的には地方都市に住む方でも、本当は東京に住みたいがお金の問題で郊外に住む、ということになっているのではないかと思います。その問題を解決するために、どれだけ魅力をアップできるのか、というのがまさに21世紀の問題だと思っております。今日は水と緑の環境づくりを中心に進んできましたが、基本的には、この問題をどう解決するのか、ということが次のステップになると思います。

梅谷：ありがとうございました。会場から何か質問・ご意見ありませんか？

会場：学会関係者なので、市長はじめ多くの方々に貴重なご意見をいただきましたことに対して、先に御礼を申し上げます。

いま樋口先生からお話がありましたように、パラダイムシフトをどうするか、というところに尽きると思います。ですから、何かをつくらなければいけないというよりも、われわれが今持っている

もので、埋もれてしまっているものがけっこうあると思います。この50年のパラダイムというのは、「持てるもの」「持たざるもの」という中で過ごしてきていますので、いわゆる「レジャー・レクリエーション」が、個人の単なる快追求とか癒しの状況から、先程栗田先生がおっしゃられたように、利己的な部分から利他的な部分へパラダイムシフトする、そしてそれが「ひと」のつながりになるのではないか、そのあたりを学会としても考えていかなければならないのではないかと、今日の議論を通じて強く感じました。ありがとうございました。

梅谷：ありがとうございました。それでは時間になりましたので、市長の方から一言どうぞ。

井崎：市外からお来しの方々に、もう一度、流山の魅力やこれからの方針をお伝えいたしますと、その基本は「都心から一番近い森のまち」という言葉で表されます。それと、財源が大変厳しいのですが、私は、「安売り」や「とりあえず」の仕事でみすぼらしいものをつくっていくのは避けたいと思っております。税金がどこに使われているのか、監視をし、また税金が有効に使われて楽しい・美しいまちに一步でも近づけるように、みなさんに関心を持っていただければと思います。

梅谷：最後に流山市民として付け加えさせていただきますと、つくばエクスプレス沿線は、環境に関心の高い都市が集まっているということですが、流山はその中で「レジャー・レクリエーション」の掘り起こしをしながら、頑張っていくと思っています。

今日はずたないコーディネーターで申し訳ありませんでしたが、これで終わらせていただきたいと思っています。どうもありがとうございました。

(2009年11月28日16時30分～18時)

(記録文責：江戸川大学 土屋 薫)

Appendix : 当日資料 【セッション A】

船を通した川とのつきあいかた

東京海洋大海洋工学部 庄司邦昭

まえがき

私が勤めている東京海洋大学海洋工学部は江東区越中島にあり、隅田川に面している。厳密に言えば永代橋の下流部で築地方面へ向かう本流ではなく、晴海方向に流れる支流に面している。大学ではタイタニックのころに救命艇として使われていたカッターと呼ばれる小型の船で、隅田川に漕ぎだす。1年生の授業、春と冬の早朝カッター訓練、カッター部による練習などで常に隅田川は生きた教室である。以前は汚染されて悪臭漂う頃もあったが今は昔の澄んだ川に戻っている。

私の川とのつきあう原点は東京海洋大学が隅田川に面して位置していることに起因すると思われる。



図1 2003年4月 隅田川の早朝カッター訓練

その後、風景フォーラムを通じて隅田川から江戸川、さらに海外の川へと興味が増していった。風景フォーラムは今回で6回目を迎え2009年11月29日(明日)、千葉商科大学で開催される。テムズ川について造詣の深い皇太子殿下を囲んでの研究会や海外調査など精力的に活動している。ここではまず海外の川と船のかかわりについてみていく。



図2 「皇太子殿下を囲んでの『河川と交通』研究会」
八十島義之助氏、鈴木忠義氏、湯沢威氏、島谷幸宏氏、長屋静子氏等参加

海外における事例調査

＜船のエレベータ＞

図3はフランスのストラスブール近郊にあるサンルイアルツピエの斜面エレベータである。もともとライン川とマルヌ川をつなぐ目的で造られた施設であり、船舶がこれを利用することにより、ヨーロッパ大陸を横断できることになる。図を見てもわかるように観光船とともに多くの見物客がみられる。

このような施設はフランスだけではなく、ベルギーのロンキエールにも同じような斜面エレベータがある。この施設はサンルイアルツピエが横移動のエレベータであるに対し、縦方向に移動する斜面エレベータである。

そのほか高低差のある運河をつなぐ施設としては、イギリスのフォルカークホイールと呼ばれる回転式の垂直エレベータやドイツのシャルムベックの垂直エレベータなどの方式もある。このような施設はいずれもそれぞれの形式で動く船を眺めるための設備も完備されていることが注目される。

日本における同じような施設としては現在は使われていないが京都インクラインがある。

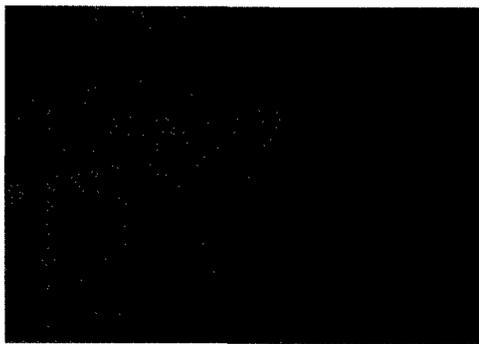


図3 サンルイ・アルツピエ斜面エレベータ



図6 ミンデン運河橋

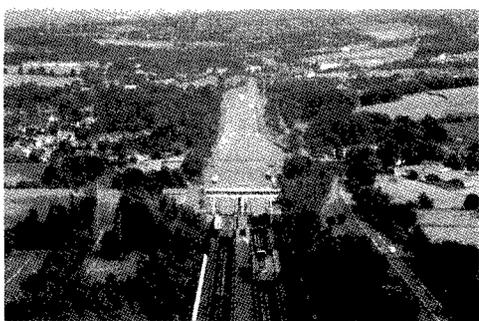


図4 ロンキエール斜面エレベータ

< 閘門 >

川や運河での水位差は閘門によって船の通航が可能となる。ソーヌ川からブルゴーニュ運河への入口につくられた閘門は手動式のものである。

ドイツのベルリンの中心部のラントベア運河に作られた閘門は、私が在外研究で滞在した研究所の脇にあり、毎日通る観光船を眺めていた。閘門に沿ってレストランも作られていて、通航船を眺めながらゆっくりする人もみられる。

江東区には小名木川に扇橋閘門や荒川ロックゲートがつくられているがここでも散歩する足を止めて通航船を眺める風景がみられる。

< 川辺 >

各地で川を見るとそこには町の一部が映し出されていて楽しい。日本の町に流れる川とくらべ日本より身近に川があることである。フランスのリヨンを流れるローヌ川でも川辺には柵もなく、そこを人が自由に散歩している。パリの

< 運河橋 >

運河と川が交差するところには運河橋がつくられている。船の交通にも立体交差がなされていることがある。ロアール川を交差するブリアール運河橋、ドイツでベーザー川を交差する中部内陸運河につくられたミンデン運河橋などがある。ここにも通行する船を見物する人、自慢げに自家用船を通航させる家族などの姿がみられる。



図5 ブリアール運河橋



図7 サンジャンドロヌにあるブルゴーニュ運河の入口

サンマルタン運河にも柵がないところがあって、赤ちゃんを乗せたバギーを押したお母さんやランニングをする女性もいる。

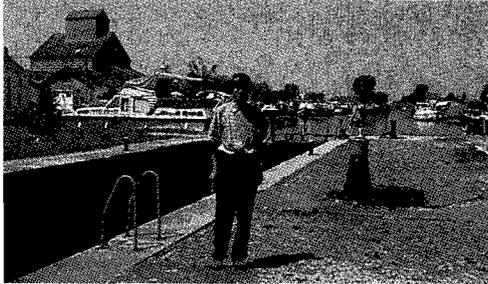


図8 ベルリン ZOO 駅付近の閘門

ドイツの運河べりには、「立入禁止」ではなく「自分の責任で入れ」と書いてある。日本でも最近は川に近付けるようになってきた。隅田川でも堤防を越えて川に近いところに遊歩道がつくられている。皆が川を見るようになれば川の利用も考えるし、川をきれいと思うだろうし、川について関心が高まるだろう。川面をとおして町を見ればそこには今までとは違った町が見えてくる。

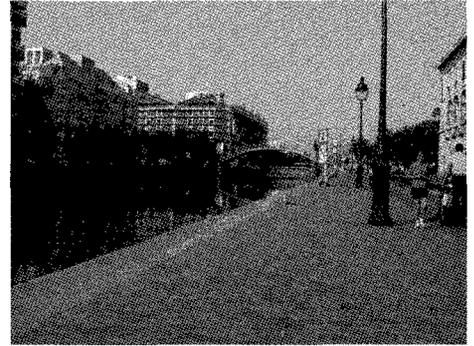


図9 パリのサンマルタン運河

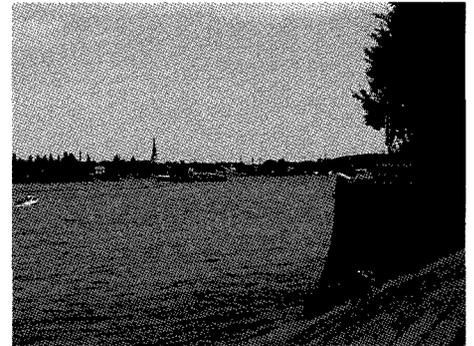


図10 マインツ付近のラインの川辺

参考文献

中瀬勝義、明戸真弓美、庄司邦昭：海洋観光立国のすすめ [増補版]、七つ森書簡、2008年

大堀川におけるカヌー体験 ゼミナールの実践

江戸川大学
社会学部経営社会学科
郡司 俊雄

ゼミの目的

- ・ゼミではスポーツ・レジャー・レクリエーションの社会的機能に注目しており、現代社会に生きる人々や社会の要求にどのように応えたらよいのか「モノ」「場」「情報」「サービス」の提供と人材育成について研究している。

ゼミに関わる社会的・地域的状況

- ・大学のある東葛飾地域は首都圏にあって産業用地・住宅地として開発が進み自然は急速に後退しているが、その分、地域社会や人々の自然環境に対する関心は高い。
- ・水辺を中心とした自然環境に恵まれ、河川敷を含めスポーツ・レジャー・レクリエーションフィールドとして多種多様に利用されている。
- ・TX(つくばエクスプレス)の開業など鉄道や高速道路・国道6号線・16号線などが交差し、都心からもアクセスしやすい地域である。
- ・人々の心身の健康・運動への関心はますます高くなっている。

以上のような社会的・地域的状況を受けて……

- ・ゼミでは地域を流れる大堀川をフィールドとする親水性のスポーツ・レジャー・レクリエーションのプログラムにチャレンジすることになった。
- ・昨年、同じ目的で実施した大学コンソーシアム柏では柏の葉公園の調整池(静水)を使用して、初心者を対象とした自然とふれあう健康づくりとして市民のための「カヌー体験(実際はカヤック)」を企画した。
- ・今回は初心者・初級者を対象とする流れの中でのカナディアンカヌー体験になった。

本当に大堀川でカヌーを漕げるのだろうか

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・(社会的条件) ・法的規制 ・行政との関わり、管理者・運営主体は? ・地域活動・ボランティア団体、スポーツクラブ ・漁業組合・農業の水利組合 ・地域住民 ・救急機関・医療機関 ・警察・大学 | <ul style="list-style-type: none"> ・(自然的条件) ・大堀川までの地形・移動方法 ・河道の様子(川幅、水深、長さ・アクセス・水底・護岸) ・構造物(橋、樋管、放水口) ・水質・流量・流れの様子 ・動物・植物 ・気象条件 ・注水施設からの放水はあるのか |
|--|---|

大堀川を漕ぎ下るにあたって

- | | |
|---|--|
| <p>管理運営主体</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大堀川は1級河川 ・国土交通省 ・大堀川は千葉県への委任? 管理(県土整備部河川整備課・河川環境課担当) ・実質上の相談受付は千葉県東葛飾地域整備センター柏整備事務所 ・大勢での使用や長期的独占使用は「許可」がいる。 | <p>河川調査</p> <ul style="list-style-type: none"> ・航行区間は～駒木橋～青葉橋の約1.1km ・大堀川の平常時の流速は新駒木橋下で約2m/秒(北千葉導水路注水時) ・川幅は約4~7m ・水深は約20~90cm(北千葉導水路注水時) ・水質は11月中旬でCODが5ppm、比較的汚染に強い魚が住める程度でスジエビ、よしのぼり、鯉がいる。 ・河底は粘土層上に砂、砂利、ドロ |
|---|--|



調整池（柏市）におけるイベント1



調整池（柏市）におけるイベント2



調整池（柏市）におけるイベント3



調整池（柏市）におけるイベント4



大堀川を往く

発表 「スポーツイベントの開催と安全性に関する課題」

遠藤大哉（NPO 法人バディ冒険団代表）

～～湘南の里海遊び～～

*主な活動内容

- ① 子どもたちの年間を通じたアウトドア教室や季節毎の水上・白馬でのキャンプ
- ② 湘南海岸での一般市民のオーシャンスイム（遠泳）大会の開催 年間5～8回
- ③ 創造的な『ちょっと冒険』イベントの開催 例 初日の出スイム

*この他、夜間遠泳、トレイルランニングの要素を含むマラニック、砂浜でのビーチラン、短距離でのランとスイムを本格的に競うオーシャンマンレースなどを開発。このオーシャンマンから、北京五輪トリアスロン代表の青山藍などが育ちました

*住んでいる近くの野山で遊ぶ『里山』遊びが最近注目されていますが、いわば湘南を『里海』として、その自然の中でのスポーツやレクリエーション活動をする『里海』遊びがようやく定着し始めています。しかし、。

<問題点、今後の課題>

- ① ぎりぎりの予算、赤字年度も
- ② 地元漁協などとの折衝
- ③ 事故：『里海』も大自然の一つという参加者の意識を、ともに高める必要性

NPO 法人バディ冒険団 ■設立：2001年12月3日

■ 住所：〒251-0038 神奈川県藤沢市鵜沼松が岡1-21-1

■ HP：www.sports-buddy.jp 「Sports and Adventure for evryone of us」

遠藤大哉プロフィール

1968年（41歳）東京都狛江市出身。日本体育大学社会体育学科、日本体育大学大学院社会体育コース修了。修士課程修了後、ニュージーランドに留学。エベレスト初登頂者エドモンド・ヒラリー卿が主宰する野外学校（OPC）で1年間スタッフとして勤務。帰国後、日体大、早稲田大学スポーツ社会学研究室助手を務める。

現在、東海大学体育学部、海洋学部、神奈川大学人間科学部、横浜リゾート & スポーツ専門学校にて非常勤講師。著書『今日からはじまるスポーツ社会学』（森川貞夫編著・共栄出版・共著）、『ライフセービング教本』（日本ライフセービング編・大修館書店・共著）。

大学時代にライフセービングの91年全日本選手権パドルボードレース、レスキューボードレース等に優勝、2005年から2008年までライフセービング日本代表監督に就任。

現在日本ライフセービング協会競技力強化委員長、西浜サーフライフセービングクラブ理事、藤沢市カヌー協会理事、NPO 法人湘南マリンオーガニゼーション事務局長。

江戸川大学経営社会学科後藤ゼミ十スポーツカルチャー研究所 (NPO バディ冒険団)

共同研究 市民スポーツの先端領域 実態調査

街ではいま、トレイルランニングがブームといわれています。東京マラソンなどに見る「女性を中心とした新しいマラソンブーム」に早くも飽き足らなくなった人たちが、野山を軽快に走り抜けるスポーツを想像以上の広がりを楽しんでいます。ネットに紹介されるレース大会だけでも 30 を数え、レースにこだわらず走る人々も着実に増えています。

同じように海では 5 KM、10 KM の遠泳への参加者が急増しています。また 100 KM を超えるようなウルトラマラソンの参加者も増えており、女性が男性を尻目にゴールする場面も珍しくありません。楽しんでいるのはごく普通の市民です。

江戸川大学研究室では、通常のマスコミには無視されがちなこうした「先端領域の市民スポーツ」に注目し、どのような人が、どのような形で、あるいは動機で、どのように楽しんでいるかの実態調査をスポーツカルチャー研究所の協力で今年から始めました。

*参加者の平均年齢は意外と高く、42・2歳

学校時代はスポーツが「不得意だった」人が 37%

どちらかといえば短距離系だった人が 37%

始めた動機の 30%が「メタボから脱出したかった」

女性の参加者は 25%前後

また週平均 9 時間近い活動を必要とするにもかかわらず、2 割の参加者が「家族との絆が逆に深まった」、34%が「仕事などの能率が上がった」と回答していました。

*従来は「レジャー・レクリエーションとしてのスポーツは、誰でもできる軽いもの」が通念でしたが、必ずしも「軽度」にこだわらず、思い切り自分を発揮する「難度の高い活動」による精神的な解放やリラクゼーションを求める人たちの領域も、そのスペースを確実に広げているような気がします。

*また女性の参加者がこうした領域では急激に存在を増しています。可処分所得、可処分「時間」の点で女性の方が男性より有利という現実もありますが、調査アンケートでは、

* 男性に勝つ、抜くことが快感か 30%がイエス

* 出産は女性を強くすると感じるか 60%がイエス

* 総合的な意味で、自分が美しくなると思うか 70%がイエス

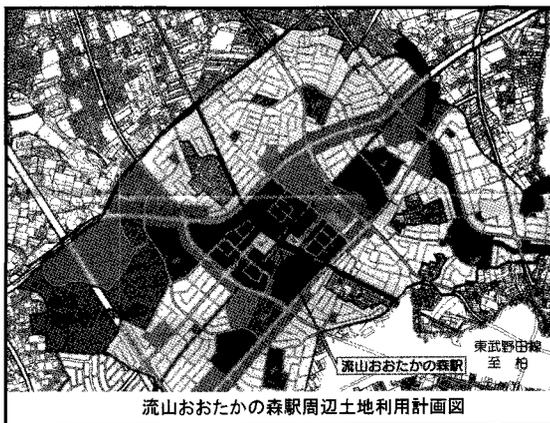
などの興味深い結果が出ています。今後、この分野を研究調査していく上で女性が重要なファクターとなることを改めて感じた次第です。

調査サンプルや分析は初歩的な段階ですが、江戸川大学冒険スポーツ社会学（後藤新弥）研究室ゼミ生による集計データや所感レポートをご希望の方はご連絡ください。

後藤新弥 sport@js2.so-net.ne.jp バディ冒険団 HP にも掲載中

市野谷の森公園を核とする水と緑のまちづくり

特定非営利活動法人
NPOさとやま 恵良好敏



流山おおたかの森駅周辺土地利用計画図

市野谷の森の保全に係る基本方針

- (1) 基本理念 市野谷の森を常磐新線沿線整備に係る象徴となる緑、生物の多様性を守りまちの環境の質を高める緑として位置づけるとともに、住民が身近な自然とふれあい、自然を学び、やすらぎを得る場として、自然の質を損なうことなく、より質の高い緑地空間の創出をめざして、保全・利用を図っていくことを基本理念とする。
- (2) テーマ いきものたちと時間(とき)をすこす まちの緑
- (3) 自然保全目標 オオタカを頂点とする多様な動植物が生息・生育できる地域固有の田園的自然の保全



保全と利用の基本方針

- 保全に係る基本方針
オオタカを頂点とする生物の生息・繁殖環境を立ち入り禁止(環境保護ゾーン)、制限(環境学習、環境保全ゾーン)を設け、適切な管理を行い、多様な動植物の生息基盤となる環境を創出する。
- 利用に係る基本方針
水辺、野遊び、雑木遊びゾーンを設定、かつて谷津田だった場所を湿地や池に修復し、自然観察センターや農林業体験、自然工作などができる施設などの自然とふれあう拠点を設ける。

生態系のサンクチュアリを守ることを楽しむ公園。



県立市野谷の森公園完成予想図

水と緑の回廊の提案(1996年7月)

身近な話題 地域のニュース

水と緑の回廊の提案

市野谷の森核に「守る」

「水と緑の回廊」提案

オオタカ営業

こんなまちに住みたい
流山市都市マスタープラン
の策定へ向けて

中間のまとめ

水と緑の都市マスタープランの提案

1996年(平成8年)12月
流山市民まちづくりネットワーク

絶滅危種に配慮し工事

流山市の市野谷の森公園予定地側に
セイタカシギのビオトープができます

「絶滅危種に配慮し工事」

流山市の市野谷の森公園予定地側に
セイタカシギのビオトープができます



【セッション B】

「世界の水辺空間 & 都市開発から考える」

樋口正一郎 <http://www.uaa-higuchi.com/> 補足資料
(2009年11月28日)

イギリスや韓国での水路や川の復活の試みが脚光を浴びています。しかし、水運で栄え、生活の中心にあった水辺や水と緑を楽しんできた日本の原風景は遠い昔話になっています。水辺空間を取り戻すことは可能だろうかとの観点から、今回のレクチュアを試みています。

江戸時代、隅田川をはじめとする運河における水運で、江戸は世界を代表する都市の一つでした。現在は運河などどこにあったのかという感じです。その象徴が、東京の日本橋です。韓国ソウルでも似たようなケースがありました。都心を東西に流れる清溪川の上に高速道路を建設し、高度経済成長を支えてきましたが、現大統領・李明博氏がソウル市長時代に撤去し、川を復元しました。流れる水と植生で都心に憩いの空間を取り戻し、多くの市民の共感をえました。日本橋を覆う高速道路撤去の話も、この清溪川に刺激を受けての話です。

川や運河を市民生活の中でどんな位置づけ、使い方をするのか。都市の構造を根本的に見直さなければなりません。イギリスでは、18世紀の産業革命で特に、都心部への物資輸送のための運河建設が活発化しました。運河をつくれれば儲かるという時代背景があり、お金持ちがこぞって運河づくりに精を出したのです。しかし、時代は鉄道時

代から車時代になり、運河が放置されたかに見えた時代もありましたが、往時のまま維持管理されてきた運河が多く、レジャー時代となった現在、多くの運河や水路、川が国民生活の中に根付いています。そして、水辺周辺の倉庫や港湾施設やドックなど、産業遺産として価値が高いばかりでなく、当時の夢の実現という高揚したエネルギーが現在にも伝わってくるものが多く、それらの建造物や施設を活かして使った新旧のコラボレーションは時代や都市をいかに組み立てて築いていくのかといった手本に見えてきます。

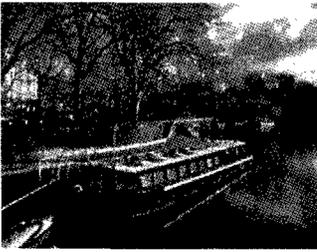
都市の新旧のコラボレーションが見事に実現されている諸外国のウォーターフロントの景観を見ると、とりあえず役に立てばいい、安普請でヴィジョンのない自然発生的な都市づくりを、なんとなく繰り返してき日本の街づくり。21世紀、一段と国際化が加速する時代に、日本の街が機能性も魅力もないということがだんだん明らかになってきました。自分の生活する街、都市について夢など描くことなどしなかったから、現在の日本の状況を作ったと言えます。市民一人ひとりが美しい楽しい街をつくろうとすることが、都市を築くことに繋がります。

◆ソウル／清溪川の復元

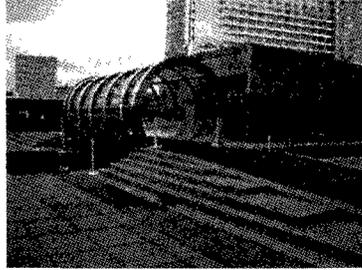
蓋をしていた高速道路を取り壊し、都心に清流を取り戻した。ソウル市民の憩いの場所であり、ソウルの繁華街の一つ明洞から北に徒歩5、6分のところにあり、観光スポットにもなっています



◆ロンドン／リトル・ヴェニスの再開発の例



昔の運河を彷彿させる、のどかに浮かぶ船上カフェ



パディントン駅裏に直結したリトル・ヴェニスのオフィスビルや集合住宅

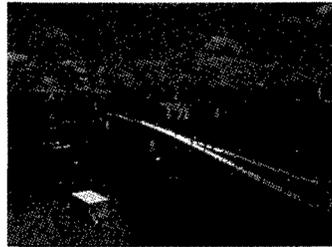


水路周辺の港湾施設跡地のビジネスパーク

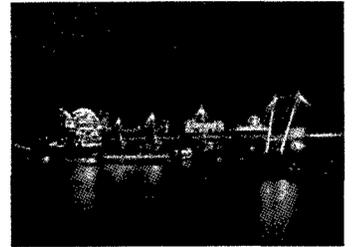
◆ロンドン／テムズ河域の再開発の例



ノーマン・フォスター設計の市庁舎。屋上では誰でも360度の景観を堪能できる。新旧の美しい対比を演出

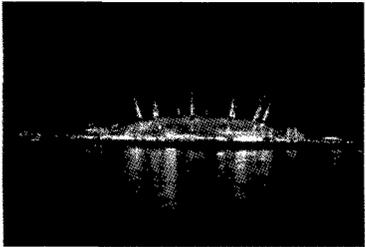


セントポール寺院とテート・モダン美術館を結ぶミレニアム歩道橋。新旧ロンドンのコラボレーション



テムズ川に架かるハンガーフォールド歩道橋。夜景にも気を使っている

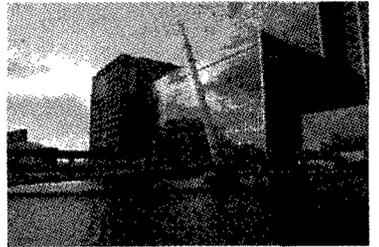
◆ロンドン／ドックランドの再開発の例



リチャード・ロジャーズ設計「ザO₂」。ミレニアム事業の一環でできたイベント会場

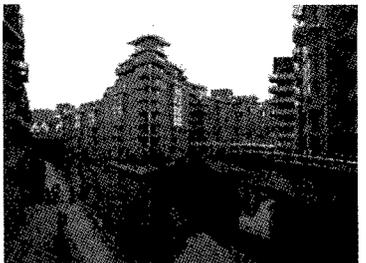


テムズ河の景観を満喫できる集合住宅。手前や対岸の低層ビルはレストランやカフェ



大きな船を通す時は回転する歩道橋

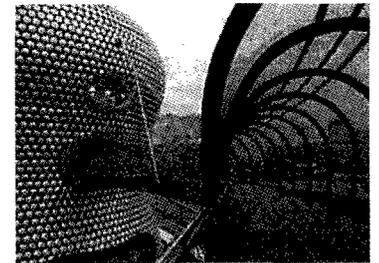
◆バーミンガムの再開発の例



産業革命時代の水路に建てられた集合住宅。昔のイメージをレンガで表現



かつての工場や倉庫をリノベーションした魅力的なカフェやレストラン



駅横にできたデパート。特異な形態で世界中の度肝を抜いた

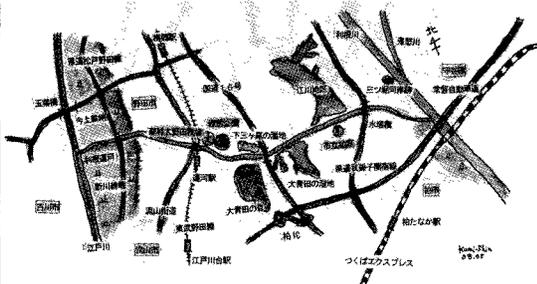
ご紹介：鹿島出版会から三冊目「イギリスの水辺環境の再生」が2010年3月刊行予定です／定価 2980円
掲載都市としてロンドン、バーミンガム、マンチェスター、グラスゴー、ニューキャッスル、
リバプール、ハル、ブリストル、カーディフ、ボーツマスの10都市を予定しています
英国旅行の案内書として、また、日本の川や水路など水辺環境を考える上で役立てて欲しいと願っています

第39回日本レジャー・レクリエーション学会
2009年11月28日

地域をつなぐ歴史の架け橋 ～利根運河の持つ力～

東葛自然と文化研究所
新保國弘

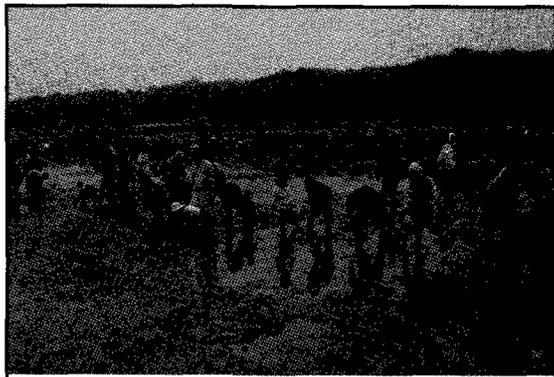
利根運河 明治21年起工,23年竣工,延長8.5km,水位1.6m,底敷幅18.2mと10m
流路延長8.5km・河川空間85.2ha・流域面積2540ha・環境基準BOD3
支流27,自流量0.5トン,上流底泥堆積30～50cm,利根川から導水10～20日/年
昭和14年高水水量500トン/秒→現在0トン
望ましい流量1.5トン:生態系,景観,水質,舟運(カヌー),農地防災



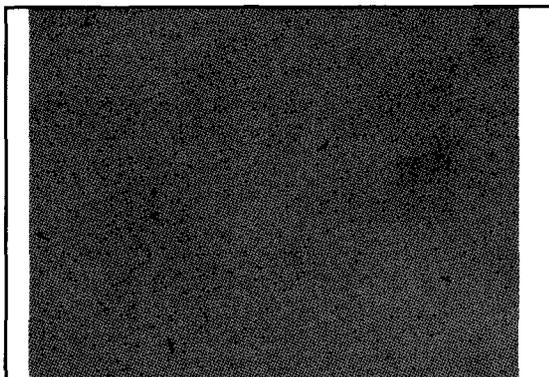
利根運河 中流 散策・ジョグ・サイクリング・自然観察の場として大人気。



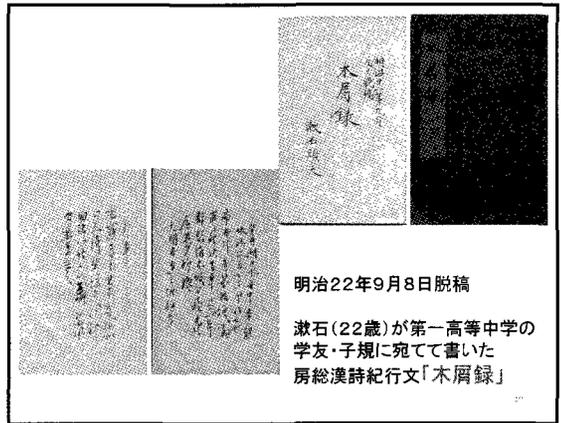
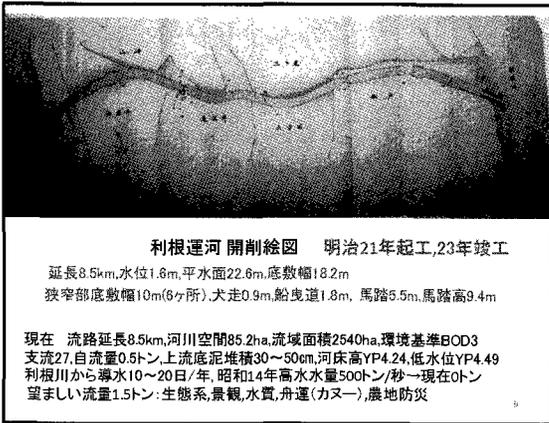
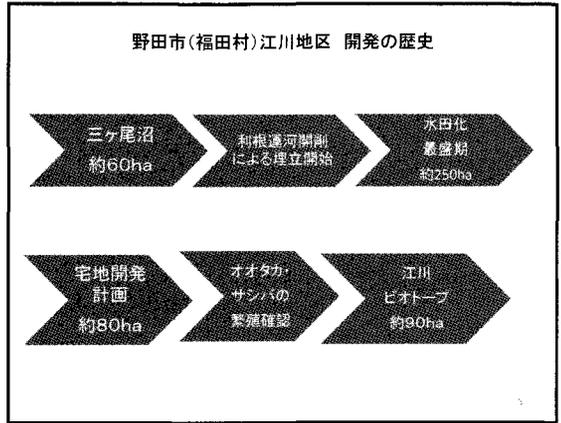
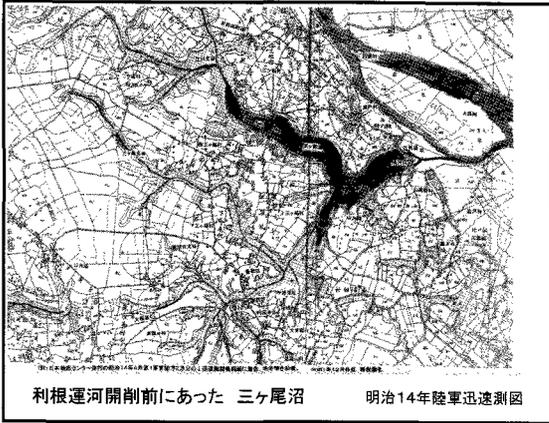
江戸川からの洪水による冠水が年2～3回 2007年9月8日



目標面積4.5haの水田型市民農園を開設 参加者600人を超え 09年。



江川ピオトープ上空にタカ柱 撮影:相島一美



利根運河開削計画の経過

明治14年(1881)春 北相馬郡県会議員・広瀬誠一郎、利根運河の開削を茨城県令・人見寧(ねい)に建議。人見はこれを内務省に提出

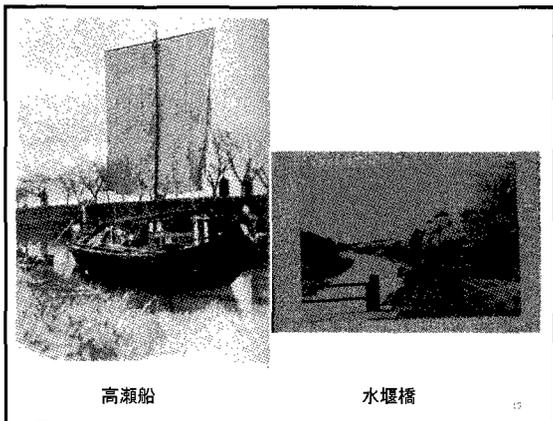
明治16年(1883)内務卿・山田顕義(あきよし)、石井土木局長 2月8日 やデレーケを随え現地を視察

明治18年(1885)デレーケに代わったムルデル、「江戸利根河 2月25日 川ミツエ尾沼河計画書」を三島通庸(みちつね)土木局長に提出

同 6月17日 利根運河の測量と設計を茨城県と千葉県で共同で行う「江戸利根運河協議書」に調印

利根運河に関わったオランダ人工師

リンド 2等工師 量水標・水準標石 22,23歳頃	デ・レーケ 4等工師 調査・設計 31,32歳頃	ムルデル 1等工師 調査・設計・監督 39,40歳頃
---------------------------------	--------------------------------	----------------------------------



高瀬船

水堰橋

15



大正時代の利根運河 利根川口

16



運河橋を行く外輪式蒸気船 大正時代

17

昭和15年6月5日
千葉読売(8面)

利根運河会社
民間経営を放棄

内務省、利根運河を二万五五六円で
買収を決定
昭和一六年(一九四一)二月二日

経営難の利根運河
国が買収を決定

武動輝く歸還
社長の帰郷

船内氏を正式推挙
社長に就任